



特定非営利活動法人 なんとなくのにお 通信

URL <http://www.nantonakuno.net/>

Mail info@nantonakuno.net



遊びにおいでよ!

11月22日(土) 居場所オープンデー



「つくって食べよう!」で活躍のキッチン。

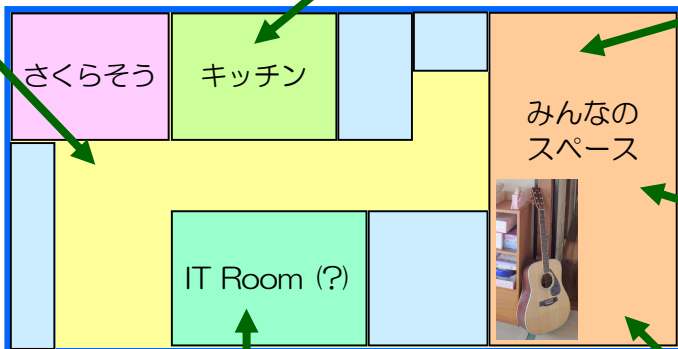


雨の日は広間がミニ卓球などのスポーツルームに。「人生ゲーム」も人気です。

報徳今市振興会館から移動して2年目、新しい居場所の紹介をかねて、小さなイベントを開きます。

この日は、だいや川公園で開かれる「日光そばまつり」の初日。居場所は日光インターの近くなので、少々道路が混雑するかもしれませんが...

秋の一日、「子どもの居場所」で、のんびりお過ごしください。

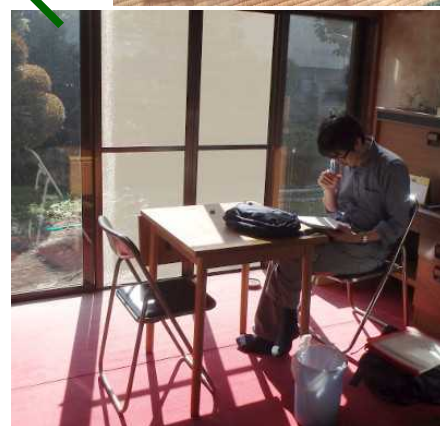


ここが「子どもの居場所」玄関です。
正面ドアは「さくらそう」
写真は廊下にあがって右を向いたところ。
報徳会館のような雰囲気があります。



(上) ネット接続PC、タブレット、ゲーム機などが置いてある部屋。

(右) 広間の南側、日当たりの良い場所。みんなの談話スペースになっています。



目次

遊びにおいでよ! 11/22	1
経営者向け協働セミナー	2
さくらそう便り	3
土壌の放射能測定	3
活動日誌	3
こんな本はいかが・27	4

居場所オープンデー (参加無料)

11月22日(土) 午前10時~午後2時 場所: 子どもの居場所
音楽ライブ・ミニバザー・ゲームコーナー・放射能測定...ほか
「居場所」の住所など、詳しくはホームページをご覧ください。

経営者向け協働セミナーに参加

右の記事は8月に開かれた「市民目線の魅力ある企業を考える－CSRから協働へ」という表題で開催された企業経営者向け協働セミナーについての報道です。

8月1日に「とちぎ協働デザインリーグ」の居場所訪問があり、その折りに依頼されました。「企業に労働力を提供できるタイプのNPOではないので...」と、趣旨にそぐわないのではとも考えたのですが、「ぜひ」ということで事業説明を20分ほど行うこととなりました。

当日は「栃木県における企業とNPO等の協働の今」という題で、とちぎ協働デザインリーグ・小林主任研究員の講演の後、NPO法人はばたき（広瀬さん）、NPO法人だいじょうぶ（前田さん）、NPO法人ウェーブ（芳賀さん）とともに、「企業とNPOの協働のキッカケを探る」というテーマで、話しました。

与えられた時間で「なににわ」ができた経緯（手塚）、「子どもの居場所」の様子（西尾）、新事業である相談支援（さくらそう）について（乗原）という順でリレー形式で活動をアピールしました。

他3団体の歴史と重みのある内容にはとてもおよびませんが、ふだん見過ごされている不登校の子どもたち、発達障がいをもつ子どもたちへの支援について、企業を経営する方々に理解していただけるとてもよい機会だったと思います。

企業とNPO、双方にメリットがあり、かつある程度持続性を持つ事業。セミナー終了後の名刺交換などの自由な話し合いの場から、そんなアイデアが出てくるのではと感じたセミナーでした。（手塚）

子育て・親育ちの茶話会

場所：子どもの居場所（日光市平ヶ崎）
 日時：毎月第2月曜日（午前10時～12時）
 次回は11月10日に予定しています。
 参加費：300円（お茶代）
 日程確認のため、お問い合わせ下さい。
 同じ悩みを持つ親御さん同士、気持ちを許し合って、情報や悩みを分かち合いたしましょう。
 「一人で悩まず、みんなで！」を合い言葉に。
 （連絡先：090-3227-7079）

企業とNPO協働促進

県、相談会などで橋渡し

地域の課題解決に向け県内の企業とNPO法人の協働を促進しようと、県は本年度、両者をつなぐ協働参加促進事業に本格的に乗り出した。売り上げの一部が寄付される商品開発や環境保全、子育て支援などさまざまな分野で、両者の強みを生かした新たな事業実施を目指す。県はNPOの活動を紹介する経営者向けセミナーの開催や、NPOの方タログ作製、企業とNPOが具体的な協働事業を話し合う相談会の開催を計画。全県的な両者のマッチングや協働事業の展開をサポートする。人材や資金、経営ノウハウを持つ企業と、障害者の就労や養育支援、高齢者の見守りなどさまざまな課題に取り組みNPOが連携、事業活動することが狙い。県は、企業側にはNPOを通じた社会貢献や市場ニーズの把握、従業員の意識向上など、NPO側には経営ノウハウの吸収や資金面の充実といったメリットがあるとしている。企業とNPOの協働の現状について、県は「少しずつ



を年内をめどに作製する。約50団体を掲載し2千部を配布予定で、企業や事業所にNPOを知る材料を提供する。来年2月ごろには県内企業とNPOがそれぞれの強

業とNPOの各担当者が集まり、具体的な協働事業の展開を模索する「事業相談会」を開く。県民協働推進室は「企業とNPOがそれぞれの強みを生かすことで、地域の課題解決につながれば。多様な企業に関わってほしいと考えている」とし、協働の促進に期待を寄せている。（山崎貴徳）

企業に前向きな声 双方メリットが鍵

NPO法人との協働には、社会貢献に目を向ける企業側にも前向きな声がある。日光市で開かれた経営者向け協働セミナーでは「NPOとつながることで社会貢献に関われる」とし、本業の生産性向上を期待する意見もあった。識者からは、NPOと企業の双方にメリットがある事業展開が、協働促進の鍵になると指摘している。8月29日夜、日光市民生活支援センターで開かれたセミナーに、日光青年会議所のメンバー約20人が集まった。障害者の就労支援や不登校の子どもの居場所を提供するNPO法人など4団体が活動内容を紹介、参

加者と名刺交換。NPO側からは寄付付き商品の開発、販売などの提案もあった。県とともに主催した同会議所顧問で印刷会社役員の小栗卓さん（39）は「お互いを知ることができたのが一番の収穫」とし、従業員の子育て支援や高齢者介護などでのNPOを活用する案を協働の一例に挙げた。宇都宮大名誉教授でとちぎボランティアNPOセンター「ほ・ほ・ほ」の藤本信義所長もセミナーに出席。取材に「企業とNPOによって協働の形はさまざまに可能性がある。両者にメリットがあるワインウインの関係が重要」とし、お互いを知るための情報発信の必要性も指摘した。（山崎貴徳）

- 7月14日(月) 茶話会(第50回)
- 7月20日(日) ベリー会:月例会、学習会
- 7月26日(日) ワカモノフェスタ実行委員会
- 7月28日(月) 通信・なんとなくのひろば(第36号)発行
- 7月 8日(火) ジャガイモ収穫
- 7月15日(火) つくって食べよう(じゃがいも料理)
- 7月26日(土) ~8月1日(金) あさやサイエンスパークサポート
- 8月 1日(金) とちぎ協働デザインリーグ来所「子どもの居場所」
- 8月17日(日) ベリー会:月例会、学習会
- 8月23日(土) ワカモノフェスタ実行委員会
- 8月29日(金) 企業経営者向け協働セミナー(主催:とちぎ協働デザインリーグ)
- 9月 8日(月) 茶話会(第51回)
- 9月10日(水) 理事会(第61回)
- 9月21日(日) ベリー会:月例会、学習会
- 9月27日(土) ワカモノフェスタ実行委員会
- 10月 9日(木) ワカモノフェスタ実行委員会
- 10月12日(日) ベリー会:月例会、学習会



収穫を待つ里芋畑

カット: numata

放射能測定のための土壌採取のお願い

■ 地表の放射能を測っています

福島原発から飛散した放射能の多くは、今も地表や樹木表面に広く散らばっています。放射能は色も香りもなく、私たちは放射能の存在を感覚で知ることはできません。どれだけの量がどこにあるのか、これからどのように移動していくのかを調べるためには、継続的な測定が必要です。

私たち「NPO法人なんとなくのこわ」は「環境研究班」を立ち上げ、土壌の放射能調査を始めました。目的は以下の3点です。

(1) 私たちの住む日光にどれだけの放射能が落ちたのかをみつめるための基礎資料を残す。(2) データをもとに、人体への放射線被ばくを減らすための対策を考える。(3) 結果を集約し、わかりやすい形での地域への情報提供、市民、子どもたちへの放射能・放射線防護の知識を広めるための資料として活用する。

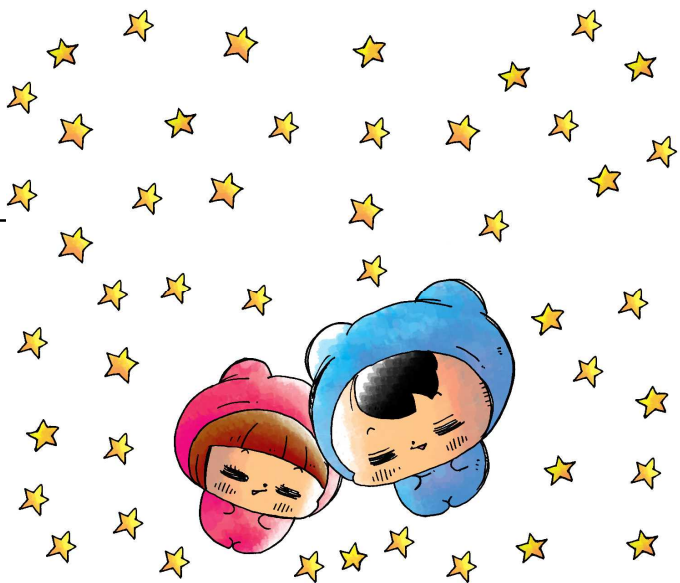
■ どうやって測るの？

地表にある放射能のほとんどは、原発の中でウランウムが分裂してできた「放射性セシウム」と呼ばれるものです。測定は「放射性セシウム」が出すガンマ線という放射線を数えて放射エネルギーを推定する装置を用います。測定対象は日光各地の土壌です。セシウムは土の粒子と結びつきやすい性質がありますので、「放射性セシウム」の多くは地表にとどまっています。そこで地表に鉄パイプを打ち込み、深さ5センチメートルまでの土を7か所採取します。土壌採取 → 乾燥・重量や体積の測定 → 放射能測定 という手順をとりますので、結果が出るまでに1週間ほどかかります。土壌を採取した地点を記録しますが、地番や個人名を無断で公表することは一切ありません。

■ ご協力をよろしくお願いいたします

地域に密着した測定によって、放射能の動きを実感することができます。放射能を「わからないもの」とむやみに恐れるのではなく、測定結果を自分の目で確かめ、データを共有し、納得しながら対応していくことが大切ではと考えます。測定結果に疑問があれば私たちの理解の範囲でお答えします。(環境研究班 三上、手塚) 土壌の採取方法の詳細は以下にあります。

<http://www.nantonakuno.net/kkg/sampling.pdf>



今年もやります! ワカモノフェスタ

12月7日(日) 午前10時 ~ 午後6時

会場: とちぎ青少年センター(アミークス)

〒320-0066 宇都宮市駒生1丁目1番6号

TEL 028-624-2203

なんとこわは「サイエンスカフェ」で参加します。

さくらそう便り

9月にはいつから、精神・知的障がいの方の相談が徐々に増えてきました。季節の変わり目だからでしょうか? 台風が来る前にも過ぎ去ったあと、晴天になっても悩み事は尽きないようです。

Aさんからは、週に4~5回電話があります。ときには「元気がでない」、あるときは「なかなか体調が良くならない」、「精神障がいだからなあ」...。そんな時、障がいがあってもなくても、みんな体調崩しやすい季節であることや、私のまわりも風邪ひきさんが増えていることを話すと安心して電話を切ります。

一人じゃないよ...というメッセージが届きますように。そんな気持ちで仕事をしています。

(栗原)生活福祉課内 0288-22-8522

特定非営利活動法人 なんとなくのになわ 通信

〒321-1261 栃木県日光市今市378

電話 090-3227-7079 / Fax 0288-21-2631

E-mail: info@nantonakuno.net

ホームページもご覧ください。

http://www.nantonakuno.net/



私たちの活動目的：

日光市とその周辺地区に居住する子どもおよび青少年等に対して、学習や自立のための支援活動と地域への啓発活動を行い、社会に出た後も継続性のある、支援と学びの場を作り出します。

私たちの事業：

- ① 子どもたちの自主性および自立性を尊重した居場所の提供および学びの場の運営
- ② 子どもたち一人ひとりに対応した、新たなカリキュラムや学習内容の開発
- ③ インターネットなどのIT環境を活用した学びの支援
- ④ 教育についての相談や情報提供活動
- ⑤ 学校外で育つ青少年の自立に関する相談および就労を支援する活動
- ⑥ 自然環境の中での学びを作り出し、自然環境保全の大切さを啓発する活動
- ⑦ 障がいの理解および啓発に関する企画運営事業
- ⑧ 第二種社会福祉事業の相談支援事業経営

こんな本はいかが？ その 27: 小学校高学年から中学生に

今回は、小学校高学年から中学生に読んでもらいたい本を紹介します。しかし大人が読んで学ぶことがたくさん詰まっている本です。

今年4月から9月まで放送されていた朝の連続テレビ小説「花子とアン」は、見ていた方も多いのではないでしょうか。その関連の本を2冊、紹介します。

◎ 『『赤毛のアン』と花子』— 翻訳家・村岡花子の物語

村岡恵理・著 学研教育出版 2014年

この本は、村岡花子の孫である村岡恵理さんが書いた本です。花子さんの生涯を語る中で「赤毛のアン」の原書との出会いがどんなに大きなものであったかが、詳しく書かれています。「人生には曲がり角がいくつもあるけれど、曲がり角を曲がった先にみきとすばらしい景色が広がっている」というアンという言葉を、花子さんは若い読者に伝えたかったのだそうです。

◎ 『『赤毛のアン』が教えてくれた大切なこと』

茂木健一郎・著 PHP研究所 2013年

著者の茂木さんは大変有名な脳科学者ですが、「赤毛のアン」が大好きで、アンシリーズは英語の原作も全て読んでいるそうです。赤毛のアンには、思春期特有の悩みや喜びや悲しみが全部詰まっていて、人生に大切なものがたくさん書かれていると言っています。脳科学者らしい視点で書かれているのも魅力です。

その他に、最近話題になっている上橋菜穂子さんの本を紹介します。上橋菜穂子さんは、今年、児童文学のノーベル賞と言われる国際アンデルセン賞《作家賞》を受賞しました。上橋さんはオーストラリアの先住民アボリジニを研究している文化人類学者でもあります。「命のつながり」や「人と人との争いや対話」あるいは「民族同士の争いや対話」など、ファンタジーではありますが、現代を生きる私たちの問題とも関連していて、考えさせられる内容の本です。

代表作をいくつか紹介します。

◎ 「守り人」シリーズとして

「精霊の守り人」、「闇の守り人」、「夢の守り人」、「虚空の旅人」、「神の守り人」、「蒼路の旅人」、「天と地の守り人」など
いずれも 偕成社

◎ 国際アンデルセン賞 受賞第一作として

「鹿の王」上・下 角川書店

(白井)

会員について

正会員：43

賛助会員：19

団体会員：4

入会金はありません。

年会費(一口)

正会員 3,000円

賛助会員

個人 5,000円

団体 10,000円



私たちの活動は会費と寄付金でまかなわれています。会員を継続し、応援よろしく願います。

会員は新たな事業の提案、会の事業の運営などに直接かかわることができます。皆様の積極的な参加をお願いいたします。

なんとなくのへや

今月「青色LEDの発明にノーベル物理学賞」が話題になった。物理学賞というと、宇宙や素粒子などあまり生活に縁のないテーマが多いのだけれど、今回は電気屋さんにおいてある「発光ダイオード電球」の発明ということで、わかりやすい■赤色発光ダイオードは1962年に、黄色は1972年に発明された。作るのが難しいと言われた青色LEDは、1980~90年代に開発に成功。製品化のための改良が加えられ、21世紀は「LEDの時代」となった■なぜ青や緑に発光するLEDの開発は赤色に比べて困難なのか。その理由は「赤に比べて波長の短い青い光を作るには、より大きなエネルギーを光子に与えなければならない」という物理法則による。いきなり難しい話になるのだけれど、秋葉原で発光ダイオードを買ってきて調べてみると、青は赤に比べて1ボルトほど発光電圧が高いことがわかる。12月のワカモノフェスタ「サイエンスカフェ」で実験してみようか。(T)